

蕉芭翁彰顛

第99号 令和7年3月

蛇くふと

きけばおそろし

雉の声

芭蕉



名品解説 其角筆「大酒に」発句短冊

三月正当三十日 风光別我苦吟身
大酒に起て慵き裕かな 其角



其角筆「大酒に」発句短冊

蕉門の高弟 其角の発句短冊です。其角は、寛文元年（一六六一）、江戸に生まれ、十四、五歳頃に芭蕉に入門。以後、その豊かな才能によって蕉門の中心的存在として活躍し、芭蕉からも一目を置かれる門人でした。その都会的で華やかな作風は、備中国松山藩主の安藤信友（俳号、冠里）や紀国屋文左衛門（千山）といった大名や富裕な商人たちからも支持を集めました。

この句は『続の原』（不卜編、貞享五年序）にも収録されます。前書は、『三体詩』に収められる賈島の詩「三月晦日 劉評事に贈る」の一節を引用したものです。旧暦では一月、三月を春としますので、三月晦日（三十日）は、暦の上で春の最後の日にあたります。この詩句は、春の風光が、佳句を得ようとして句吟する自分に別れを告げて去っていくこととするとして、去りゆく春を惜しむ気持ちあらわ

しています。賈島は、「推敲」の故事で有名な詩人で、一字一句にこだわり苦吟したことで知られています。

この詩句を前書とした其角の句は、四月一日の更衣を詠んだものです。当時は、四月一日（三月晦日の翌日で、夏の最初の日）に、綿の入っていない袷に一斉に着替えますが、前日の大酒のせいで、起き上がって着替えるのが苦しい、と詠んでいます。三月から四月に変わるその時に、賈島は佳句を得るために苦しんだのに対し、其角は二日酔いで苦しんだということ。酒好きだった其角らしい、ユーモアあふれる一句です。

なお、本短冊は、現在開催中の芭蕉翁記念館企画展「江戸時代の出版と芭蕉」（令和七年六月十五日まで）でご覧いただけます。

（伊賀市文化振興課学芸員 服部温子）

巻頭句解説

元禄3年(1690)に詠まれた句です。雉は、雄の妻恋の声が優美なものとされ、『万葉集』の時代から愛されてきました。また、「焼野の雉」と言われるように、親子の情愛が深い鳥としても知られています。この句は、そうした古典における優美な姿とは対照的な食性を詠むことで、それまでの雉のイメージを打ち破った一句です。

顕彰芭蕉翁

第99号

編集・発行／公益財団法人

芭蕉翁顕彰会

〒518

0873

三重県伊賀市上野丸之内1-17の13／電話0595・5121・4081